

「チェンジホスピ」をテーマに 第24回ホスピー研究会開催

取材／読売新聞中部支社編集局 編集記者 片岡 太



大会委員長
名古屋記念病院 院長
藤田 民夫 先生



実行委員長
名古屋記念病院 副院長
草深 裕光 先生



第24回ホスピー研究会(大会委員長＝藤田民夫・名古屋記念病院院長、実行委員長＝草深裕光・名古屋記念病院副院長)が9月6日名古屋市熱田区の名古屋国際会議場で開かれた。今回のテーマは「CHANGE HOSPHY」で、医師、看護師、臨床工学技士らがチェンジに関する様々な研究成果を相次いで報告するなど意欲的で、活気ある研究会になった。

昨秋の世界的な金融危機は、わが国の経済を直撃し、その結果まだ立ち直りのきっかけもなく、出口の見えない状況にある。この影響は経済界だけでなく、医療界にも波及している。これに加えて小泉内閣が打ち出した社会保障費年間2200億円の削減が重くのしかかっており、深刻

な打撃を受けたままの状態が続いており、医療経営は厳しい環境下にある。このため、医療関係者は、医療経営ができるのかどうかといった強い危機感を抱くとともに現状の逼塞状態を打破し、いかにして存続していくか、という大きな課題を抱えている。

しかし、いまだもって明確で、具体的な対応策を見出せないでいるのが実情といえる。こうした中においてホスピーグループが生き残り、地域住民に良質な医療を提供し、合わせてホスピーが掲げる理念をいかに実現するかという大きな問題に直面している。

今回の研究会の開催にあたって挨拶した草深実行委員長は「全職員の新たなチェンジが、ホスピーグループの今後の存続と前進につながります。チェンジの精神が全職員に生まれ、根付くことを期待

しています」と述べ、今回の研究会の大きなテーマになったチェンジの必要性を強調した。その背景には、現状に甘んじていることは、ホスピーグループの衰退につながり、ひいては存続・存在までが危うくなるという強い懸念を示したものと見える。

そうしたことを避け、ホスピーグループが生き残り、前進するためには、全職員が今の医療を取り巻く現状についての問題や課題をしっかりと認識し、それを共有することが重要であり、そのためには、強い危機意識と自己意識のチェンジがキーポイントであると判断し、研究会のテーマをチェンジホスピーとした。

研究会の第1セッションの「Change from here---チェンジはここから」では、東海クリニックの齊藤和洋・副院長が企業戦略のツールとして用いられている